

第十六回 齋藤茂吉短歌文学賞

小池 光 『滴滴集』

短歌研究社

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 尾崎左永子

川村二郎

永田和宏

前 登志夫

(五十音順)

小池 光 『滴滴集』

(自選十首)

石川さゆり「船頭小唄」にききはれし数十秒がこの日のすべて

みちのくの面白山にうさぎ出て雪はしら雪あしあとのうたげ

肛門をさいごに嘗めて目を閉づる猫の生活をわれは愛する

人の骨箸こつから箸につまむとすかかろ文化をつくづく憎む

水中より抜きとられたる魚うをひとつ桐のまないたをまさしく濡らす

法隆寺夢殿を外へ出づること早春のやまに入りてゆくなり

名もしらぬとほきしまより流れつきテレヴィジョンあまた秋の浜辺に

チエルノブイリの人去りし村に夏草はうつしみの美のかぎりをつくす

雨脚は赤い靴はいてちかづき来 たたきの石のわたくしが前

雨なかに出でてゆきたるうつしみは枇杷色の傘ひろげてゐたり

● 選考委員による選評

一つの意志を貫いた一冊

岡井 隆

感想ひとこと

尾崎左永子

小池さん、ご受賞おめでとうございます。雑誌に連載が始まる前に、あなたの意図と抱負をおききしたことがあります。この歌集は、見事に一つの意志をもって貫かれた成果だと思います。題詠のように見せかけていて、ふつうの題詠ではありません。小テーマによってまとめあげた数首のつらなりが作者の人生観と社会観をそれとなく表現しています。年齢相応の壮年の思想といたったものも、知らず知らずのうちに、読者にはわかって来る仕掛けです。久しぶりに興奮して読んだ一冊でした。重ねて、お祝いを申し上げます。

小池光氏の『滴滴集』には、さまざまに工夫が凝らされ、いくつもの発見があり、また章立てから構成に至るまで神経が行き届いていて、充実した精神的収穫を感じさせる。私は小池作品に対して決して親切的な読者とはいえず、日常的な素材と独特の遊び感覚が、たとえそれが現代性であるにせよ、やや小柄で物足りない感想をもっていた。しかし、この集では、日常そのものが重石であり、それゆえに、新鮮な発見も跳躍もなし得たことをよく納得できた。更に高度な視点と冒険とを、いつそう期待して、この受賞を心からよろこびたい。

はずむ言葉

川村 二郎

待たれていた受賞

永田 和宏

キビキビと動き回りよくはずみ、外の世界の壁にぶつかってはね返り、その瞬間に光を放つ。そんな油断のならぬ敏捷な言葉が、ここには満ちあふれていて、眼の前にさらさらした万華鏡めいた図柄を映し出し、限りなく変転を続けている。読者はこの変転に時として応接に遅ない思いを味わわれながら、野茂投手の尻の偉大さや、指揮者シノーポリの死の唐突さや、画家ラ・トゥールの明暗画法のめざましさや、武辺者福島正則の没落の無残さを、まざまざとまのあたりにする心地にひたるのである。

じつにすんなりと決定した今回の茂吉賞であった。現代歌人のなかでもっとも茂吉を咀嚼し、もっとも茂吉を強く意識している歌人が小池光氏であるかもしれない。妥当でだれにも異存のない決定であったと思っている。

方法的にも、文体からも、現代歌壇に多くの問題を喚起し続けてきた小池氏であるが、わけても素材の切り取り方からしたかさと辛辣かつ人の気づかないところに視線が届く目の良さは誰もが認めるところである。しかし一方で私自身は、本『滴滴集』のなかでも、作者の意図の目立たない、そっと忘れ置かれたような作品に心を惹かれる。

千鳥ヶ淵の上空にきてゆるらかに
向きをかへつつある飛行船

こんな歌の良さは何かと正面から問われると難しいが、いい歌は、どういいかが説明できないからこそいいのだと、『滴滴集』の多くの作品は語っているようである。

比類のない詩的ひらめき

前 登志夫

『滴滴集』はとびきりの作歌辞典といってもいい。どの一首に出逢っても、さまざまな世界がひらけ、いまだ経験しなかった人生の現実が見えてこよう。

自在な諧謔やユーモアの比類のないひらめきと、その冴えた技法に、われわれは不思議な陶醉をおぼえる。おぼろげな人はこの歌集に近づかない方が無難かもしれない。

仏壇の扉のための蝶番さがしもとめて
ちまたを行くも

ざぶとんに眠る囊を猫ともいふ
老荘とほく笑へるこゑす

あやまたずわが眼の中に落ちしとき
めぐすりの一滴は大海

そのユニークな批評の毒がきわまるとき、作者の生の悲哀がさりげなく胸を打ってくる。作



第16回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

小池 光 (こいけ ひかる)

1947年(昭和22年)宮城県柴田町生まれ(57歳)。
本名小池比加児(ひかる)。
埼玉県蓮田市在住。高校教諭。
1972年東北大学理学部大学院修了。同年「短歌人会」に入会。
現在「短歌人」編集人。

歌集

「バルサの翼」(第23回現代歌人協会賞)
「廃駅」
「日々の思い出」
「草の庭」(第1回寺山修司短歌賞)
「静物」(第52回芸術選奨文部科学大臣新人賞)
「時のめぐりに」(第39回迢空賞)

評論集

「短歌 物体のある風景」
「鑑賞現代短歌 岡井隆」
「現代歌まくら」
「茂吉を読む」(第2回前川佐美雄賞)

エッセイ集

「街角の事物たち」

共著

「齋藤茂吉—その迷宮に遊ぶ」
「昭和短歌の再検討」
など

受賞のことば

小池 光

このたびはからずも齋藤茂吉短歌文学賞という大きな賞をいただくこととなり、よろこびというより賞の重さにいま身の崩れるような思いがしている。選考に当たられた選考委員の方々また関係者の皆様に心からお礼申し上げる気持ちでただいっばいである。

わたしは隣県宮城で生まれ育って蔵王は夕日の沈むところであった。その山の向こうに齋藤茂吉のふるさとがあったことなど、子供のときはなにも知らなかった。短歌は学生時代にはじめたが、まっすぐ茂吉に向かったわけではなく、いろいろ回り道をして、偶然のように必然のように茂吉の歌集を身に引き付けて開いたのはここ十年くらいのことである。そこでの感想は『茂吉を読む』という一冊につたなく記した。短歌は作るだけでなく「読む」という作業がごく大切と思うが、わたしは茂吉を読むことを通じて作歌の上でじぶんなりに無数のヒントを得たと思う。『滴滴集』の歌はおそらくその過程を通してできあがった。その思い出多い一冊に齋藤茂吉の名を冠する賞をいただくのであればこれ以上のことはないと思える。

そして、短歌を続けてきて三十余年、さまざまな人とのよき出会いと有言無言のはげましに支えられてきたことを、思い返している。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
- 第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
- 第四回 前 登志夫 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
- 第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
- 第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
- 第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
- 第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
- 第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房
- 第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 第十五回 清水房雄 『独孤意尚吟』 不識書院

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内
TEL・〇二三一六三〇一―二九〇三